
Side story

月島 真昼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S i d e s t o r y

【Nコード】

N 4 2 5 2 I

【作者名】

月島 真昼

【あらすじ】

「当事者を回避してる」なんかの歌詞にあつたこの言葉にすごく同調する日和見主義者な私は脚線美女を後ろから蹴り飛ばした。

私は呼吸をする。それと同じぐらい普通に学校には隔離があり別離があり、まあ平たく言えばいじめがある。別段目立った物でなくとも社会が人の集合であり人間に好き嫌いの感情があり能力に差異がある限りはそれは絶対である。

例えば碓井。漢字を変えれば“薄い”だとか言われてる通り影が薄いがゆえに孤立し、いじめの標的になつてる私達と大差ないはずの少女。

例えば彼。高慢で不遜で鼻持ちならない…… あれ？ どっかで見た表現だな？ まあ私の見る携帯小説のサイトには5万作以上の小説があるからそのどっかで読んだのだろう。うむ。

とにかくその目付きの異様に悪いそいつも社会不適合者で孤独であつた。彼のことを簡潔に表現すると「反抗期」という言葉が当てはまると思う。

教師が教科書丸暗記していないと解けない問題をテストで出されてそれを問題文からどう理詰めで解けるか説明を求めたり（余談だが私が覗き込んだとき彼の答案にはしつかり がついていた）、担任が学級委員が決まらずにイライラして前期にやっていた女子に押し付けようとしてその女子が拒否して説教同然の説得に出たときにそいつが学級委員をやることにどうメリットがあるのか また他の生徒と何が違うのか と怒鳴りつけたり。

率直に言つて私は碓井よりも彼がほうが嫌いだった。理不尽なんて生まれたときから理不尽なんだ。へいこら笑つて堪えておけばい

い。

しかしそんな彼がいるからいじめは影でしか行われなかった。碓井はまだマシなほうだ。衆目にさらされたほうがそういう物は悲惨だと私は理解していた。

ちなみに私だって別に碓井をいじめたい訳じゃない。だけどやらない。面倒臭いことになる。まあ少しだけスカツとするのは否定しない。痛みは感じない。感じたら潰れると理解してるから他人事だと麻痺させる。だけど……

その日の標的が碓井じゃないことに私はかなり驚いた。標的はクラスで少しだけ浮いていた女の子だった。1年のころに2、3度だけ話したことがある。長身で足の長い脚線美？とかそっちのわりと美人。

目をつけられるタイプかと問われれば、一応は是。
でも大半の女子は長身と顔で憧れの目で見るけどね。……ああ
私もそうだよ、憧れるよこの野郎。

「あの子　なんかしたの？」

訪ねてみると、

「碓井にハンカチやってた」

極大につまらない答えがタバコをふかしているその子から返ってきた。

ハンカチとタバコ、害があるのはどーっちな？　もちろんそんなことは訊けない。私は面倒事が嫌いな日和見主義者なのだ。なんかの歌に「当事者を回避してる」って歌詞があつたがあれにはすごく同調する。

教室に動きがあった。“彼”が席を立ったのだ。同時に怯えたように碓井の背が丸くなる。よかったね今日はあんたじゃないよ。口のなかだけで唱えた。

「ちよつと用があんたけどお」

その子が彼女に言う。碓井が一気に顔を上げた。少しは嬉しそうなお顔でもするかとおもったがマジで泣き出す五秒前だった。

「……」

脚線美女は一度周囲に視線を動かして、それから無言でその子と私についてきた。少し気味が悪いと私は思う。これから先何が起こるかなんて予測がついてるはずなのに。なぜ彼女は抵抗しないんだろっ？

教室を出るとき同じぐらいのタイミングで逆側から碓井が出ていった。今日は碓井に用はないからクスクス笑って見送ってまるで“いじめ用に使ってください”って立地条件にある女子トイレに向かった。

まずは私が後ろから蹴ってその子が足を引つ掛けて彼女を転けさせた。屯ってた他数人が卑屈な笑みで彼女を見る。

「もっと賢く生きなよ」

私なりの人生観に基づく忠告を彼女に捧げる。その子の前だから「かしこく」って言ったけどほんとは「さかしく」って言いたかった。同じ漢字で送り仮名も似てる癖に意味するところはまるで違う気がする。私が思うにかしこくはバカだ。さかしくはズルい。

彼女は不気味に…… いや、違うな。投げ槍に笑みを浮かべた。

「なに笑ってんのぉ？」

その子が後ろから髪の毛を掴み上げた。顎を最初に上半身が持ち上がる。靴の爪先を腹に擦り込んだ。

痛いだろ、普通。それなのに彼女は悲鳴を噛み殺した。表情さえ投げ槍な不敵を保つ。……もしかしたら彼女は碓井に手を差し伸べたらこうなることを覚悟してたんだろうか？ だとしたらそれはすごいことだ。人は損得を抜きにして他人の痛みを肩代わりなんか出来ないと思っていた私の思考を根底から覆す行為。普通に尊敬に値する。

だけど、ただそれだけの話。その子は何度か彼女を蹴ったし集まった他の数人も汚水のついた雑巾だとか顔にべったりつけたり……描写は生々しいから控えよう。あ、彼女、素っぴんであの顔なんだ。いいなあ……

私もほどほどに参加していたら、ごくふつとに予想外の事象が起こった。

彼が入って来た。女子トイレに、まるで俺がここに居るのは当然だとも言いたげに躊躇いなく。

碓井だ あいつが報せたんだ。私は直感した。それから「変態！」とか叫ぼうかと思ったけど他にそうしない理由を察して何もなかった。ボコる気だ。個人的にはぶっちゃけ こええー 超逃げたい。穴があつたら緊急退避したい。

彼が動いた。私たちの視線の中央を悠々と闊歩して彼女の腕を掴

んで引き摺り上げ立たせた。誰かがなんか言おうとしたけど彼の三白眼に睨まれて言葉は喉に詰まった。それから私たちに視線を回す。三白眼、だからこえーよ。

その子がデッキブラシを用具室から引っ張り出して彼に向かって振るった。っておいもし彼が避けたら私にあたっ……

ゴツ と鈍い音がして彼の肩から二の腕のあたりにあたった。一瞬、彼が横目に私を見た。え…… まさか止めてくれたのか？

刹那、彼が右腕を加速させた。その子の首を捉えて壁に後頭部を打ち付ける。容赦ねえな……

信じられない って感じのその子に一瞥をくれて、

「人を殴るときは殴られる覚悟をしろ」

吐き捨てるように彼は言った。それから彼女の手を引いてトイレから出ていった。…… かつけー 不覚にもそう思った。

残った私たちは罵声を飛ばしながらも呆然としていた。リーダー格のその子はまだ涙目で噎せている。

一通り噎せ終わったその子が、叫んだ。

「ざけんな 誰かあいつ殺してこいよ」

無理に決まっただら。こえーよ。あいつはチキンレースで元からブレーキ踏む気がない類いの人間なんだよ。

「……白けた」と、誰かが言った。うん その通りだ。このへんが引き際だ。…… あれ？ 視線が私に集中してる。もしかして言った

の、私か？

「だよねえ」と誰かが同調する。1人がそう言えば波紋のように広がる。伝染する。それが集団。

その子だけが空気が読めてなかった。

「お前らぶつ殺すぞ！」

どうやって？ 1人じゃ碓井にも立ち向かえないあんたが集団つて武器なしでなんか出来るのか？ 若干の侮蔑を込めてみんながその子を見た。

「っ……」

強く唇を噛んでいた。血が滲みそうな位に。泣くな いまはまだ。あんたのメッキは修復可能だから。

「帰ろっか」

ケタケタ、ケタケタ。全てがそんな笑い声に聴こえる錯覚。長い日陰の暮らしから高校デビューしたその子にはきつと聴こえてる。まっ わかんないかね、経験あるやつにしかこの気持ちは。

まあ 私は“さかしく”生きるから「集団」ってやつに属してその子に背を向けた。

自業自得？ 誰かがその子を笑えばきつと私は内心で怒る。かつて大きな痛みを刻まれて彼女は彼女なりの処世術を身に付けたのだ。それが誰かを貶める行為でも、それを強制したのは過去であり意思ではない。

「……あ 忘れものした 先帰っというて」

だからたまには“さかしく”じゃなくて“かしこく”生きてみよう。

私はゆっくり2年校舎の外れにある女子トイレに足を向けた。

そういえばあの子の漢字ってどなんだったっけ？ 園子…… だ
ったかな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4252i/>

Side story

2010年11月21日10時41分発行